

でんでら通信 第百十一号 令和五年七月

八月二十三日（水）施餓鬼供養会

本年より通常どおりの供養会とさせていただきます。す。

なお、準備の都合上、前日までにお志をあげていただきますようお願いいたします。

十時より山門、新亡施餓鬼供養会

今年初盆を迎えられたお家の方は、準備の都合上、おまいり人数をご連絡ください。

また当日までに白木のお位牌をお持ちください。

十一時より檀信徒施餓鬼供養会

古い旗、塔婆は本堂の箱にお入れください。当日供養し、新しい旗、塔婆をお渡しします。

坐禅会

七月二十六日（水）十時に坐禅会を開催します。

みなさんのご参加をお待ちしております。

ずいしよ しゆ な

随處に主と作る

いよいよ暑い夏がやってきました。境内の草もどんどん伸びてきて気になってきます。

以前亡くなった祖母は毎日草取りをしていました。

晴れた日はもちろん少々の雨でも草取りをしています。若い私は「どうせ、寒くなったら枯れるのだから、大変だろうし止めたら」と言うと、

「何にもせんと、ブラブラとは、ようおらん」といつてせつせと外に出ていました。あの頃は今のよう「デーサービスもありませんでしたし、明治生まれの祖母にとつて悠々と時を過ごすことは、申し訳ないという気持ちがあったのでしよう。

永平寺を開いた道元禪師は二十四歳の時に宋（そ）う・現在の中国）の国に渡りました。目的は、「真実の仏法」を明らかにすることでした。

道元禪師が天童山景德寺にいた時のことです。道元禪師が仏殿の前まで行くと、背中曲がった肩の白い老僧の用和尚に出会いました。

典座（てんざう・禅寺の食事担当）である用和尚は、敷瓦の上の一つ一つ丹念に椎茸を干しており、炎天下の中、日笠もかぶらずに汗をダラダラとかきながら、作務（さむ・禅修行でいう作業のこと）を続けていました。

留学僧の道元禪師は気の毒になり、思わず

「おいくつですか」と尋ねました。

用和尚は手を休めて

「六十八になるよ」と答えました。

「高齡の老僧が行わずに、他の若い僧にやらせてはどうですか」と道元禪師が言うと、

「俺は是吾にあらす」

（他人がしたことは自分のしたことにはならない）と間髪を入れずに用和尚は返答しました。

《自分がやらずに誰がやるか。主体はあくまでも、自分である。》

「確かにおっしゃるとおりです。けれども今日は特別暑い日ですから、少し休まれてはいかががでしょうか」

と道元禪師はいたわりの言葉をかけました。すると用和尚は、背筋をピンと伸ばしてしっかりとした口調で

「更に何れの時をか待たん」

（いずれの時を待つというのか、今やらずにいつやるのか。）

場所は常に「ここ」しかない。

「即今、当所、自己」

（過去でも未来でもなく現在の今、ここで、人に任せず、自分にできることを行うのだ）

臨濟宗は臨濟禪師が開いた宗派です。この臨濟禪師の言葉を集めた書物に「臨濟録」があります。これに「随處に主と作れば、立処皆真なり」という言葉があります

いついかなる場面でも、自分を信じ全力を尽くせば必ず道は拓ける、という意味です。

主役の仕事はもちろん、脇役であろうとも、与えられた場所で、できることをしっかりとこなしていく。人生は長いようで短い。一瞬一瞬の今の積み重ねであります。明日が絶対にあるという保証はありません。今できることを精いっぱいやる。人はどうしても易き方に流されて、後回しに時間を過ごすしてしまうものです。随處に主と作る、肝に銘じたものです。